

へキャリアアップ講座報告

キャリアアップ講座に参加して

福岡魁誠高校 平岡 直

令和五年八月七日(月)、福岡教育大学にてキャリアアップ講座が行われ、受講した。参加者は十名に満たない少人数での開催であった。

講座の内容は書道鑑賞力・実技力養成講座である。受講者の専門教科の資質、能力の向上を目的として行われた。内容は福岡教育大学が所蔵している名品の鑑賞、手紙の解説、書道パフォーマンス鑑賞、書道教員として現場での課題や悩みについての構成で行われた。

福岡教育大学の所蔵品の鑑賞は、中林梧竹の作品をはじめ、山本竟山の作品を鑑賞した。中林梧竹の作品は、年代ごと、揮毫場所によって作品の趣が異なり、書家としての知識や学びの深さ、芸術にかかる感情の起伏の変化を感じさせられた。特に中国に渡り、書を学んだあとの作品はその影響を色濃く受け、学んだものに対するアウトプットの速さ、深さを感じさせられた。その中の作品で隷書のような字形をもち、どこか篆書のような雰囲気もあり、独特な趣を感じる作品もあった。左払いのような起筆はとてもユニークであり、書家としての自由な発想をも感じた。

また、山本竟山の作品は基本的な作品の形式を学びながら、揮毫された文字が何と書かれたのかを解説していった。山本竟山の作品を鑑賞しながら感じたことは、書かれている内容の重要性である。自分自身、作品を書く際に、こういった文字を揮毫するのかわ、当然吟味するが、どうしても字面を考えてしまう。言葉の意味よりも、文字の造形、筆遣いで魅せやすい文字を優先してしまうくらいがある。しかし、竟山の作品は書

かれている内容を重視しており、送られる言葉のもつ意味こそが重要であるように感じた。かつての書家達が言葉に対する知識が深く、書道以外の知識を多くもっていたかを痛感させられた。自分の書作、一教員として、多くの知識や学びの上に指導しなければならぬと改めて感じた。今後も自分への戒めとして心に留めておきたいと思う。

手紙の解説は比田井天来から田中松太郎に贈られたものを題材として扱った。田中松太郎は鳴鶴四天王の一人でこそないものの、日下部鳴鶴と交友があり、その弟子である比田井天来とも交友があった。手紙の内容は天来が松太郎に詫びを入れる内容であった。日下部鳴鶴より、客人として歓待するよう言われていたにも関わらず、自分が家におらず、外出をしていたことについてであり、日常のどこにでもあるような内容であった。比田井天来と云えば、書を学ぶ者にとっては崇高的な感がある書人であるが、なんとも人間臭い内容であった。手紙の文字は詫びる文章であること、天来より松太郎のほうが年上ということもあり、丁寧に書かれている印象を受けた。

書道の教員としての情報交換は、今の自分の現状を考えさせられるものであった。時間的に余裕のある、夏休みの期間に改めて考えることは有意義であった。

本研修に参加し、最も感じたことは、ゆつくりと書に触れる時間を作ることの大切さである。現在、教員としての雑務に追われ、書に触れる時間を費やすことがほとんどできておらず、筆に触れるタイミングは部活動での指導だけである。とても書を学ぶものとして足りるものではない。忙しさを言い訳にせず、書に費やす時間を確保したいと思う。

末筆ながら、本研修をご指導くださった服部先生に心よりお礼申し上げます。結びといたします。